

# 主観的精神と文学

——ルカーチの知的相貌をめぐって——

神波比良夫\*

(信州大学文理学部)

## I

文学の研究において精神の研究はその大きな、かつ最も重要な分野の一つであり、「人間精神と文学」なる研究テーマは今更こと新しく問題として呈出するのが奇異の感を抱かしめる程に、当然すぎる研究題目である。それにもかかわらずドイツにおける文芸研究の歴史を見ると、この点に学者の注意が喚起されるようになったのは、かなりおそい時期においてである。すなわち1767年にいたって始めてヘルデルの「断簡第三集」がでて、この中で「如何にさまざまな変化と変形とのあとで、文学の精神がその現在の形態をとるにいたつたかを研究すべき」ことを説いて、かような研究によつて今まで無視され、誇張的、誇大的、空虚な言葉とされていた精神や悟性などが、その本来の尊厳と権威とをかいふくしうるのであらうと予言している。ついでフリードリッヒ、シラーの「素朴と感傷の文学」もおなじく、人間精神の感覚形式、人類文化の進展に伴つて生ずる精神の様態変化よりして発生する文学の差違を説明するものであり、さらにこれより進んで文学研究にも一つの大きな基盤を与えるものである。ロマン派の巨匠フリードリッヒ、シュレーゲルもまたその講演「古代および近代文学の歴史」のなかで、哲学および宗教的世界観、また国家思想や政治思想の発展をも文学の中にとり入れるべきことを説くとともに、国民の知的生活の顕現となるべきような文学を要求した。またヘーゲルにいたつては、かれ独自の哲学にしたがつて世界史を客観的精神の弁証法的発展であると断じ、この考え方の当然の帰結として、文芸の研究において精神的観察法をその研究の中心となすべきことを要請している。

しかしこれらの有益な、力強い示唆にもかかわらず、それが文芸の実際の研究の基盤となり、実りおおき土壌となるまでには、長い年月と、さらにこの間における文芸研究の科学的地位の確立ならびに、これに応じた研究方法の確立とをまたねばならなかつた。すなわち、ようやく20世紀の初頭にいたつて、ウイルヘルム、ディルタイはこの間に熟しきたつた歴史観とかれ独自の構造的心理学の理念とをあわせて、一種の歴史哲学を形成し、哲学、宗教、芸術と文芸との文化機能を一望のもとに展開することを可能ならしめた。

このディルタイの示唆に刺戟されて、文芸と精神との関連に関する理念にもとづいた研究の気運は盛んになり、その研究成果にはじつに目ざましいものがあつた。たんに名前だけあげて行つて見ても、グンドルフ、コルフ、ウンゲル、シュトリッヒ、ペーテルゼン等の幾多の研究はディルタイの指示した研究領野におのおの独自の道を切りひらいて入

\* 信州大学教授

り、おのおの特異なる精神観よりして、突に前人未踏の地を開拓して、精神の多様な形態を示すとともに、またこれに伴つての文学及び文学研究の様々なるあり方を示したのであつた。

精神と文学、このテーマのもとに既に数多くのすぐれた研究が提示されてはいるが、いま一応ふり返つて考えて見るとここにいろいろな疑問がおこつてくる。すでに文芸、文学と云う言葉さえ一義的な概念ではない。ドイツ語において文芸なる概念に属する言葉としては *Dichtung*, *Literatur* 又は *Schöne Literatur* と多種類の言葉がある。*Dichtung* は内容形式ともに高い、美的な価値があると認められる文芸作品に用いられ、これに反して *Literatur* は美的価値、形式、内容の点で劣るもの、あるいは甚だしくは文字で書かれたもの一般を呼ぶのに用いられる。*Schöne Literatur* と云うと、この両者を併せたもの、高級、低級を問わず快的な読物と云う意味で使うようである。我々が文学と云うとき、しばしばこれらの概念が混同されたり、或は概念が明確に意識されることなく、使われているきらいがある。そして理想的な意味では *Dichtung* を意味して用い、また実際には *Literatur*, *Schöne Literatur* の意味に用いられたりしている点に、問題の紛糾の原因がある。また更に注目を要するのは、同じく文学と云つても、ある人は詩を、ある人は小説を頭の中に考えながら、この同じ言葉を使うのである。文学なる語がこの両者の何れをその背景としているかによつて、また先の *Dichtung* と *Literatur* の場合に見られたのと類似の問題と混乱が生ずる。

これと同じように、いなこれ以上に問題が多いのは精神の概念決定であろう。その範囲、組成、性状の何れをとつて見ても、その多義的であるのに一驚を失する。例えば全人間において精神の占める地位、または範囲も時代により、個人により、その世界観により非常なる変化が見られる。精神と肉体の主人公、個体の支配者と云う観念の結びつきは既に太古以来の考え方であつて、今日の我々も相当この影響をうけている。しかしこれと反対に近來においては精神と云う観念を完全に抹殺してしまおうとする考え方もないではない。この考え方も勿論理論的には成り立ちうるものではあるが、しかし生きた人間からの直接の印象、特にすぐれた人間からの印象が肉体の背後にあるもの、即ち精神の観念を我々の心の中に強く浮び上らせるのも否定すべからざる事実である。

また人間の外界に対する働きかけ、自我の他我に対する作用の相において人間を見るとき、その働きの中核、または主体の観念がそこに浮んでくるのは自然である。そこにその人独特の反応形式と云う意味での性格、またその精神の外界、とくに他我に対する影響の面より見た人格等の観念が発生する。これは主観的精神の一つのとらえ方である。そして人間が人間に与える直接の印象としては、特に生命度の濃厚な人間のあいだの接触の際の印象としては、これが明確、不動の存在性をもつものである。人格の原語であるギリシャ語の *persona* も、性格のその *charakter* もともに元來は、舞台に使用される仮面を意味していた。のちにこれが転じて俳優の演出すべき精神、さらに転じて一般に人格、性格の意味となつた。もつとも *charakter* の方は仮面という意味のほか、彫りこまれたものの意味を元來持つていて、これが現在の性格の意義にたいして大きな影響を与えている。

さてこの性格および人格の厳密な定義であるが、実際にこれらの言葉をもつて表象されている処は非常に多様であつて、ゴールドン、オルポットによれば、人格に関する定義はじつに50個以上を数えることができるそうである。先きに述べた如く、精神なる言葉が多義的であり、その中核をなす主我もまた多義的であるとすれば、人格の定義が僅か50個と云うのは、むしろ少きに失するかも知れない。

さらに精神を云ふにあつては、哲学をのがすことはできない。すべての世界観や哲学は結局するに精神、人格を如何に見るか、人格を宇宙の奈辺に位置せしめるかの考え方を基底としていると云うことができよう。ワルテル、ブリューニングは近世哲学をこの人格の位置づけの観点に従つて次のごとく分類している。

- (一) 人間を確固たる客観的秩序と関係づけるもの。——実在哲学、価値哲学、自然主義、反射主義、行動主義。
- (二) 人間の一回性、生きた歴史性、自由と云う点に著目して、(一)の場合のごとくに客観的関連に人間をはめ込んでしまうことに反対する人格主義、個人主義、主観的理想主義（キアケゴール、ヤスペルス、マルセル）
- (三) 人格主義や個人主義においては未だ個人的構造が残存しているが、この構造がなくなつて、僅かに非合理的な「流れ」になつて残る。そして無意識な vital な、生命の創造的な力が合理的な精神と対比され、強調される。これを非合理主義と云う。（ニーチェ、ベルグリン、クラークス、オルテガ）
- (四) 非合理主義の混沌から一般妥当性のある形式や規範に復帰しようとする傾向がある。伝統的哲学と違うのは、この形式、規範そのものが、主体によつて、あるいは非合理的生命の衝動そのものによつて、あるいはその背後の存在によつて構成されるように見える点である。先験主義、サルトルの哲学。

なおマルクス主義は非合理主義とプラグマティズムの中間におかれる。

ブリューニングはこの各々をさらにいくつかの型に分つて、近世の著名なる哲学をほとんどすべて網羅している。現代人はすべてその奉ずる処の世界観や信念によつて、この何れか、またはその亜型の人格像を心にもつている訳である。これがまた文学にも反映されていて、文芸作品の人物描写においても、また文芸批評においても、これらの人格観がなんらかの形でその基底をなしている。特にドイツ文学史においては第2次開花期以後、中世以来のキリスト教的な客観的秩序の中にはめこまれた人格観が次第にうすれて、これにかわつて道徳その他の客観的秩序に関係づけられた人格観が出現したがさらにこれが放棄せられて、つぎつぎと第2、第3、第4の人格観が現出しているのが見られる。かくてブリューニングのすべての類型はそのままに文学に写し出されている。特に近代文学に登場する人物の理解はこの後三者の哲学の理解なくしては不可能である。

さて人格と云うとき、この後三者だけを取つて見てさえも、その各々は他に対して宇宙的に隔絶した世界観を背景としている。それ故に現代において簡単に、その何れもが納得されうる定義を見出すことは困難であろう。むしろ我々はさし当つては、この何れにも深入りすることを避けて、これらの諸哲学の宗祖、イマヌエル、カントの「主我の確立により人格が生じ、人格は人間を人間たらしめるものであり、人間が動物、事物と

異なるのはこの人格によるのである」と云う最もかんたんな定義に一応満足しよう。自我の確立が人格形成の基底であるとすれば、人格の成立は自我、他我の区別より始まると云える。既に他我の区別があれば、ここに森羅万象が生れる。人間の精神の世界、その対象の世界、働きの世界、その何れに先在性を認めるにせよ、これらはみな人格の発生を出発点とするものでなくてはならない。幼児期の自我他我の区別の発生、即ち人格の発生の時期はこの問題の単に概念的な例としてではなく、具体的な事例として興味深い事例を提供する。ここより人類の文化が生れ、文学もまたここに淵源を發すると云えよう。

かくの如く人格は個人の精神の外界に対する働きの面より見たる名称であつて、ほぼ同様な意味をもつた性格とともに、精神の一つの把握である。個人の精神の把握である云う意味において、主観的精神の一つの姿と云うことができよう。しかるに精神にはかかる個人的肉体を土台としない別の存在が認められる。勿論その発生の元初は個人的精神を土台とするのであるけれど、一度形態が与えられて、その元来の担擧者から独立して一個の個体となると、その主体の意志その他とは全く独立した存在を続けて行く実在がしばしば精神、思想の世界では認められる。例えば文学作品を見よ、また時代精神、国土の精神と称せられるものを見よ。元來は個々の人間の精神を舞台として発生したものでありながら、一度形態を与えられ、独立すると、その生産者の意志とは独立の生活を始め、いなそれどころか、もとの主人である個人にさえ規定的な影響を及ぼす場合がある。これを名づけて客観的精神と云う。この客観的精神の形成には言語が与つて大いに力がある。

言語の注目すべき特色に抽象性がある。元來言語は発生の初期において具体的なものを示すとともに、且つ多分に魔術的要素を含んでいたものと推測される。ところが文明の進歩とともに言語は具体的事物から離れた抽象的観念を作り出し、且つ具体的事態にない想像の事態を表現する方向に強い展開を示した。個々の単語によつて具象的なものを指示すると云うよりも、これが連なつて生ずる意義、すなわちシムボル活動によつて思想がなり立ち、またこの中に思想が運ばれるようになった。このシムボル活動は、人間が客観的現実を把握する際に、単に客観的鏡像的把握以上に出んとするには欠くべからざるものである。この鏡像的現実把握より、より高次の現実の把握が独自の存在権と価値を有する精神的創造であり、またの名はさきにあげた客観的精神である。すなわち精神の客体化したものである。

ある時代の思潮にせよ、あるいは文芸、芸術の流派の考え方にせよ、これが一度その生みの親である主観的精神より離れて独立すると、今度は元の担擧者であつた個々の作家や思想家、その他時代のすべての人の心をさらい込んで押し流して行く一つの力となる。この意味でドイツ文学に生起した各種の文学運動の跡を見るとき感慨にうたれるものがある。これらの文学運動の思潮はみなそれぞれ一つの客観的精神と見なすことができる。たとえばロマン派の人々を見よ、その個々の作家を対比するときには、おどろく可き距離と相違が見出されるのにかかわらず、これを他の時代の作家、他の芸術思潮に属する人々と比較するならば、そこに明確截然たるロマン派的な特徴が歴然として現れるのである。この精神が一つの風潮、独自の実体となつて単にドイツのみならず全欧

州、とおく日本にまで大きな影響を与えたのである。またナードラーの民族、国土よりする文学史をまつまでもなく、各国土にある種のかかる客観的精神が形成されているのも否むべからざる事実である。例えばグリルパルツェルの如き異色を求めることをしない詩人をとつて見よう。レッツング、カント、ゲーテおよびロマン派の遺産を摂取して、シラーを凌ぐ劇詩人となることを生涯の念願としたこのグリルパルツェルの作品や自伝を読むとき、その第一頁から、古都ウィーンのパロック的、カソリック的な雰囲気と、ホフマンシュタール、シュニッツラーに通じるオーストリー文学に特有な精神の柔かさや心理的観察の鋭さを感じるではないか。

この顕著な、人間の心を引きつける客観的精神の方がまず文学研究者の関心をさそつたのは当然である。ディルタイ以来盛況をきわめた精神史的観点にもとづいた文学研究家達は、むしろ個人精神や人格などよりも、時代または文学思潮の精神、すなわち客観的精神よりして、文学事象を解明せんと試みたものが多い。例えばウンゲルの「ハーマンと啓蒙時代」グンドルフの「シェクスピアとドイツ精神」の研究もこれであり、シュプランガーやクルックホーンにせよ、シュトリッヒにしても、何れも時代または人間の集団に共通する精神構造を認めて、これよりして個々の文芸事象を説明している。ウンゲルやグンドルフも精神史の方法をドイツ文芸史に本格的に適用したものであつて、両者ともに一個の創造的人物を中心においてはいるが、そのめざす処は、個体そのものではなくて、この人物を象徴的事態として、これを中心として転回する客観的精神の生成、展開の過程である。コルフは云つている。「個々の文芸をその個性的理念内容について吟味し、せいぜい同時代の哲学の理念に関係づけるのではなくして、この理念内容を更に大なる関連からして了解し、かくして個々のものを、生々發展する生命有機体の多かれ少かれ、重要な器官として評価することである。」

文学はその媒材たる言語を通じて、この客観的精神、広く云えば文化一般と主観的精神との折衝の場である。フィヒテの云う、主観はその活動のためには客観を己れの中から作り出して、これを素材としてその働きを顕現する、と云う考え方は、この間の事情を物語るものであろう。しかるにこの一方の極である客観的精神の研究にかくも大なる努力が払われ、成果を収めているのに反して、他の極である個人の精神、人格の文学に対する研究は、とかく低調であり、今日までほとんど見るべきものがないのは如何なる理由によるのであろうか。

この主観的精神の側からの研究の中でも多少とも成果をあげているのは、作家の個人的精神、人格からしての作品の構成の研究、作中の人物の研究、特に性格描写と云われる部分である。この方面における著名なものとしては多くの詩人の伝記的研究がある。例えばジューメルの「ゲーテ」などは経験的ゲーテを越えて向うの、本質直感によつて得られた、理想形としてのゲーテ、即ちイデーとしてのゲーテを示している。またシュテファン、ツワイクの「デモン」はクライスト、ニーチェ等の天才的人物において個人の意志を超越した魔術的力がこれらの詩人達をその惨酷な運命に否応なしに引きづつて行く姿を描いている。この魔術的な力は個人の精神や人格を超越したものと印象づけられるほどに大きな力でありながら、而もその人に生れついたもの、その人格の一要素で

あると考えられている。

そもそも近世において文学の研究に科学的な骨組みが与えられたのは、ウイルヘルム、ヴント以来である。これよりヴァインデルバント、リッケルトを経、ウイルヘルム、ディルタイにいたつて、文学研究の科学としての地位、その方法が確立された。彼は精神生活の現象を限られた数の要素によつて、因果關係的に従属せしめるのではなく、記述的、分析的な学として、精神的な生をその個有の心的構造から、その部分と全体とに存する一種の法則性からして了解することを提唱したのである。「自然はこれを説明し、精神はこれを了解する」と云うのは文化科学と自然科学の行き方の相違を端的に云い現したディルタイの言葉である。すべての精神的な創造、文化の諸体系は、「人間精神の生きた関連より生じたもので、またこの関連からのみ了解される。」精神は生きた関連からのみ了解されるものであるが、実際の把握にあたつては、雑然たる生の様相の中から単位を求める必要がある。ディルタイはこの心理的な了解は、充分発達した人間の完全な精神生活をその全体において把握し、分析することからして得られるもので、実際にはかような精神生活の関連が典型的に現れる人格について行わるべきである、と云つている。

近代の本格的文学研究の出発にあつて、ウイルヘルム、ディルタイが餞けた言葉は、人格において人間精神を分析、把握することであり、その把握は了解によるべしと云う言葉である。グンドルフ、ジムメル等の研究を見ると、一応この要請が達せられているように見える。然し客観的精神の側からの文学研究に比較して主観的精神の側からのものは、何となく既に底をついた感じが支配的ではないであろうか。このよつて来る処は何であろうか。

文学研究においては例えば人格なる概念が如何に研究されているであろうか。ツワイクはそこに魔術的な力までも入れて考えんとした。勿論文学の研究、その最終的評価決定にあつて、文学以外の領野からその基準をあおこうとするのは誤つた考えである。しかし、その一步前の基礎研究の段階においては——丁度客観的精神の研究が文学の研究に大きな貢献をもたらしたように——近隣科学の成果が大いに参考とされるべきではなからうか。しかし一般文学研究家は詩人、作家の精神に例へば精神医学的観念を用いて分析せんとするとき、既にこれに排斥を加えないまでも、これを無視するが如き態度をとかく見せがちである。ここに意識下の世界の問題、更には医学的心理学の収め得た知識を基礎とした研究によつて、豊かなる、新しき研究領野を見出すことはできないであろうか。また人格の構成に関する知識、その要素の知識も大いなる収獲を文学の研究にもたらすことがないであろうか。勿論フィヒテの考えの如くに、主観的精神だけでは全く働くに対象がなく、一方また客観的精神だけでは働く力がない。人間の本原的動き、特に文学には主観・客観の両精神は互いに因となり、果となつて現れる。その何れの研究も怠ることは不当であるが、特に主観的精神の構造、反応形態の研究は緊急を要するものではなからうか。また個人的精神の成素の中に何か適当な研究単位はないであろうか。かかる問題が最近著者の関心を大きく占めておつた折柄、ゲオルク、ルカーチが

その「写実主義の諸問題」の中で、「知的相貌」なる概念をかかげて、文学作品の構成及び研究の一基本観念たらしめんことを提唱した。

## II

「写実主義の諸問題」は9個の小論文よりなり立っている。その冒頭の論文は「芸術と客観的真理」と題されて、客観的現実と我々の認識との関係、さらにまたこれらと芸術との関係が論ぜられている。すなわち一種の認識論であり、その後の諸論文、特に本稿の主題たる「芸術的人物の知的相貌」の基礎的論文である。したがってここではまず「芸術と客観的真理」に述べられている認識論を紹介して、この知識を介して「芸術的人物の知的相貌」においてルカーチが何を云い、その際彼が心象に描いている処のものが何であるかを明かにして行きたいと思う。

ルカーチの認識論の大前提はまず、客観的世界は主観的世界と全く同じ確実さをもつて、また主観とは全く独立に存在すると云う考えである。またこの客観的世界に関する我々の認識はこの世界のありのままの、真の姿を伝えていることも自明の、説明を必要としない真理として提示されている。この事態はまた芸術による客観的世界の反映についても全く同様にあてはまると主張されている。

ルカーチの認識論の第二の大きな支柱は、客観的世界の把握に際して、具体的、感覚的把握と同様に、いなそれ以上に、シムボル化した把握、抽象的観念による把握の方がより高度に現実をとらえるものであるとする原則である。ここに客観的現実の把握に高級、低級の差が生じることになる。「芸術と客観的真理」の中でこう云われている。

「ここで問題とすべき第一の重要な問題は外部世界の直接の映像の問題である。すべての認識はこの映像にもとづいており、またこれはすべての認識の基底であり、出発点である。しかし映像はたんに認識の出発点にすぎないのであつて、認識機転の全体ではない。」さらにまたこれに続いて、「そのように非常に簡単な一般化、概念の始めての最も簡単な形成（判断、結論等）はすでに、人間によつての深い客観的世界関連への常に前進する認識を意味する。」あるいは真理、認識に深淺、高低の差のあることを説いて、「物質とか自然法則とか云う抽象、価値と云うような抽象、一言にして云えば、すべての科学的な抽象は自然をより深く、より完全に反映する。生きた観察から抽象的な思索、これよりして実践——これが真理の認識、客観的現実の認識の弁証法的な道である。」

しかも現実是我々の論理的な把握法、概念、抽象をもつてするこの弁証法的方法によつて深く把えられるばかりでない。むしろ現実そのものは我々の自我、人格との折衝によつて、浅くもなれば、深くもなる。「外部世界の客観性は死んで硬化して、人間の実践を単に宿命論的に決定しているだけのものではなくて、人間の実践と離すことのできない交互作用の中にある。」

さきに現実の科学的な認識も、芸術による現実の反映も本体的には同一の機転であるとされた。しかればこの両者の差別は如何にして生ずるか。ルカーチは文芸においては典型化の方法が用いられ、これによつて現実の反映が芸術になるのであると説く。この

点典型化は科学的認識における抽象に相当する地位を占めるものであるように見える。すなわち実際の現実がその大部分において大きな問題もなく、葛藤もなく、平々凡々に推移するからと云つて、これをもつてその真の姿として、この平凡を写しうれば能事終れりとして、満足してはならない。かくの如く把握された現実とは「悪しき現実」であり、「悪しき平均」である。むしろ文学の使命は、この葛藤も問題もない、算術平均的な現実の中から理論的に（すなわちルカーチの場合には当然唯物弁証法的にの意である）問題を摘發し、人類社会の進むべき方向の理念を顕現するのに適当した事態と人物をとり上げ来つて、描き出さねばならない。悪しき平均の中で鈍麻され、問題の意識を失つた、低級な現実の人物、事態をモデルとしながら、すなわち個別的なものをそのままの姿において描きながら、しかも問題のありか、または社会のあるべき姿を指示することをルカーチは典型化と云うのである。

現実と云うものはその大部分が愚直な、小さな自我の利益を守つて得々としているボーダーマイエルのなもの、こそこそと不平を云い、争いはあろうが、それもこれも押し流して、目出度し、目出度しですんで行つてしまう世界なのである。しかしこれは意識の低い、低級なる認識であつて、現実のより高き、より真なる姿は、この中から1パーセントまたは0.5パーセントにも欠ける、社会的矛盾をはらんだ事態を抽出することにあるのである。この微量なる事実を抽出し、人々に提示して、正しい認識と行動へと人を誘うこと、ここに芸術の真の使命がある。この典型化が芸術の現実反映のための技術である。

Wir haben aber bereits darauf hingewiesen, daß die großen gesellschaftlichen Widersprüche sich in der Alltagswirklichkeit abzustumpfen pflegen, daß sie in der Alltagswirklichkeit nur in Ausnahmeweise in vielfältiger, reicher, nie in entfalteteter und reiner Form erscheinen können. Die Proklamierung dessen, was in der Alltagswirklichkeit möglich ist, zur Norm des Realismus bedeutet also notwendig den Verzicht auf die Gestaltung der gesellschaftlichen Widersprüche in ihrer entfaltetesten und reinsten Form. Diese neue Norm des Realismus muß sogar die Alltagswirklichkeit beengen.

ごく少数の事実であつても、その矛盾をとり上げないならば、これをルカーチは「現実の悪しき平均」と云い、この平均には最早生命は失われていると云う。少数例の矛盾をとらえ来つてこれを本質的な動向とし、これを顕現せしめるために極端な事態、人物を形成することを彼は典型の形成と云うのである。

典型化によつて現実のより高き反映を与える芸術作品は、ただ典型化されたものを並列的にならべるだけでは、芸術作品としての効果が期待されない。ここに登場してくるのが構成の問題である。そしてルカーチは構成の重大要素として、知的相貌なる新概念を提起する。知的相貌は典型形成の重要な手段である。

Nur weil in einer an extremen Situationen reichen Handlung die verschiedenartigsten Menschen die verschiedenartigsten gedanken- und gefühls-

mäßigen Widerspiegelungen derselben objektiv-seinsmäßigen Widersprüche zeigen, kann das Typische an Hamlet-Charakter gestaltet vor uns treten.

Gerade deshalb spielt für die typische Gestaltung das tiefe und energische Herausarbeiten der intellektuellen Physiognomie eine so entscheidende Rolle. Die geistige Höhe des Helden in der Bewußtheit des eigenen Schicksals ist vor allem notwendig, um das Extreme der gestalteten Situationen aufzuheben, um das Allgemeine, das ihnen zugrunde liegt, nämlich die Erscheinung der Widersprüche auf ihrer höchsten und reinsten Stufe, zum Ausdruck zu bringen.

作中の主人公の自己の運命に関する意識の高さがかく作品全体の、一つの世界としての均整化に大きな役割を果たすと云うルカーチの考え方には、彼の人格、知的相貌に対する世界観の意義が関係がある。「形成される人物の世界観を包含しない、特徴づけは完全ではあり得ない。世界観は意識の最高の形式である。それ故作家が世界観を素通りにしてしまうならば、彼の表現する人物の最高のものを逸したのである。世界観は深い、個人的な体験である。内的実体の最高の特色的表現である。そして同時に時代の一般的問題をうつしている。」

知的相貌の文芸作品における意義をルカーチは構成の観点から説明している。また彼はこれを作中人物の階級づけとも名づける。如何なる文学作品もそこに登場するすべての人物が同一の精度をもつて描かれているものではない。ここに自ら厚薄がある。主人公には最も多くの注意と関心が払われるに反して、一時的な登場人物にはほとんど性格描写も与えられない。ルカーチの階級づけとはこれを指すものであつて、この際その知的相貌、または世界観と時代の最大の問題との結びつきが、この人物が作中の中枢的地位を占めるか、否かの分れ目になると云うのである。その例として、ルカーチはシェクスピアのブルータス、ゲーテのエグモントをあげて、これらの人物が社会の発展の一定の段階、また一定の社会的葛藤にとつて、実に特徴的、典型的の形姿であることを指示している。

### III

以上大体においてルカーチが「知的相貌」なる新語をもつて何を云わんとするか、これを生んだ彼の文学観を通観したわけである。

さすがに共産主義国家の中においても屈指の文学研究家だけあつて、この観点は近代文学——特に階級文学を対称として考えるとき——非常に適切なもので、文学研究に欠けていた一つの空隙がこれによつて埋められた、の感がある。トーマス・マンはその「ドクトル、ファウストの発生」の中で、ルカーチが自己の文学を兄弟のハインリヒ・マンの文学とともに、ヨーロッパ的危機、近代ブルジョア文明下における野蛮をあばいた警告の文学と評価したことに対して賛意を述べ、かつその慧眼に敬意を表している。しかし同時に「ヨーゼフ」に対してルカーチが注意を払わなかつたのに対し、恐らくはそ

の「神話」的要素によるものとは推測しながらも、遺憾の意を禁じえないと云っている。知的相貌の着想のすぐれている点は認めながらも、而もその概念決定をルカーチの云う通りのものとして考える場合には、そこに一種の限界が感じられるのも、またこの神話的要素は全くとり入れることのできないルカーチの世界と関連があるのでなからうか。

特にこの狭さが痛感されるのは、その認識論の領域においてである。基本的観念の根拠づけと定立がなされねばならぬ場合に、しばしば引用されて、しかも神の託宣の如き絶対権威をもち、説明の必要なきものとしてレーニン、スターリンの言葉が掲げられているが如きはその一例である。たとえば、抽象によつてより高き真実性が得られ、主我と他我との交互活用によつて客観反映の深化が得られると云う。しかしここに当然同一の現実のいくつかの反映が可能になり、これらがみな同様に真実であることになる。すると真実の強度と云うか、程度の差、価値の差が問題になつて来なければならない。そしてこの点の証明に大きな努力が払われることが当然期待される。しかるにルカーチは唯物弁証法を用いることにより、この困難が全く取り除かれるのであると云う。客観と主観との交渉の深さの差異が、整理の方法である唯物弁証法によつてなくなつてしまうかの如くに。しかもその際レーニンの言葉が引かれている。「唯物論はある事件の如何なる評価に際しても、直接且つ公明にある社会群の立場に立つことを義務づけるものである。いわば党派づけの要素を己れの中に蔵している。」問題の内容を見ないうちに、当事者の一方の立場に立つことを義務づける、従つて問題の解決の方向に一義的、拘束的な軌道が与えられてしまう訳である。こうした考えがレーニンの言葉であるとする理由によつて絶対な、最終的審判者の如く取り扱われている。唯物弁証法を用いている社会の結論はすべてしかく一義的、且つ絶対に誤りのないものであろうか。

これについて面白いゴシップがある。且つてソ連邦において社会改革の成功が謳歌された時期に、かかる社会においてはもはや社会的葛藤は存在すべからざるものであると云う無葛藤論がおこり、すべての文学作品は大平の謳歌をこそすれ、社会の葛藤を描くが如きはその真実を伝えないものと断定された。かくてロシアの社会の葛藤をとりあげる作品や作者は攻撃、非難されたのである。しかるにこれが最近は全く逆になつて、ただ単に無葛藤論に反駁攻撃が行われるのにとどまらずまた、「日毎の葛藤」なる劇さえ盛んに上演され、大成功をおさめているとのことである。

かくて問題の一つは我々がルカーチと全く同じ世界観や認識論に立ちうるか、どうかにもあろう。ブリューニングによればマルクス主義は彼の人格の位置づけより為された哲学の分類において、非合理主義とプラグマティズムとの中間の集団に入るべきものである。一面においては常に弁証法的な発展をしており、人間の存在を下からして決定する処のマルクス主義的経済的機転があり、一面においては世界を創造と労働によつて変化させ、世界を自己の内部から創り出そうとするマルクス主義は、人間を自己自身とその世界とを生産する実体として把握するものであるとしている。この人格観、世界観の立場に立てば、もちろんルカーチの認識論、文学論は容易に理解できるものであり、また自明の事柄でもあろう。

これに対抗する世界としては、純粹の非合理主義、実存主義、人格主義、先驗主義に

よるものもあれば、キアケゴール、ベルグソン、クラークス、オルテガに基く文学観等があり、これが漠然とまた一体になつて、階級文学思想に対しての。その何れが正しく、何れが誤つてると云う前に、ルカーチの論に全面的養成をなし得ない世界の違いを感じるのである。神話的要素を許容し得ない世界と、これに大なる価値を認める世界との違いである。まづ第一に文学のこの基体の相違が「知的相貌」の文学における適用に対してある限界を加える一つの原因をなしているのではあるまいか。

しかしながら主観的精神の観点からの研究が不充分であり、むしろ研究の新しき出発点への探求が要請されておる折柄、ルカーチの知的相貌は単なる世界観の相違のみをもつて放棄されてしまうべきではない。

そこで我々は今一度知的相貌の主観的精神との関係、特にその際問題になる知性との関係を考へて見たいと思う。ルカーチによれば知的相貌の必然性は典型的なるものの解釈に制約されるのである。即ち個体をして社会的、世界観的、存在的問題を具現せしめる、云いかえれば、個をもつて社会の弁証法的推移の単なる抽象的代弁ではなくて、典型とならしめるためには、作中の人物はこの知的相貌を欠くことができないと云うのである。世界観が単なる借りものでなく、生命のエキスであるならば、これが意識の最高の形式であり、人間の深い、個人的体験の粹であり、この世界観を表明する作中の人物の能力は現実を典型的に再現するために必須欠くべからざる要素である、とルカーチは云う。しかもその際知的相貌の完成せる形態は、抽象的思想による必要はない、またその思想、世界観が正しいものであるか、どうかも問題にならない。「作中の人物が我々の目の前でその時代の最も抽象的な問題を彼等自身の個人的な、彼等をして生死を賭さしめる程重大な問題として体験する場合にのみ、その文学的な形姿は典型であり」、そのような高さに人物の思想、意識を上昇せしめることが成功しているかどうかが目ざれねばならぬ。ルカーチは知的相貌の説明において、しばしば意識の高さと云う言葉を使つている。また醒めたる人間の共通の世界なる言葉もよく用いられている。階級思想的な意識の高さ、斗争の社会、すべてがすべてを敵とし、あるいは味方として戦い、能動的に相手を見つめる斗士の世界、と云うようなルカーチの言葉よりして、彼のすべての考え方の背景に階級斗争の理念が横わつてることがますます強く印象づけられる。しかしまた半面には個人を通してのその時代、その世界の最も抽象的な問題を体験として描き出す、と云う言葉は後で例示するようにトーマス・マンの芸術を思わす言葉である。マンの明日の文学と自負する芸術と階級文学との関係と云うような考えも心をかすめる。しかもこの言葉からすると知的相貌は相当知的、思想的なものでなければならぬかのような気がする。ルカーチは知的相貌には思想、世界観の正、否は問題でないことをくり返し述べておるが、しかしその論文の冒頭において知的相貌の概念を与えんとするに当つて、彼はプラトンの「饗宴」を引いて説明している。この具体的な例と、上の知的相貌に関する説明を比較するとき、ルカーチの知的相貌の概念には動揺が見られるような気がする。しかし我々はここで一応知的相貌とは個人の理念的、思想的、世界観的なるものと感情、性格、気性、体験などとの関連を問題にした言葉と解釈して、その文学に対する意義を検討して見たい。

思想的、世界観的因子が文学作品の人物形成において重要なものであることには問題はないと思う。しかしこれが絶対的なものであるか、どうか。例えばグラッペの如き作家を見ると思想的、知的なものを避けることによつてむしろ作品の生命度が強化されている。少くともここでは知的相貌が作品構成上の主要手段ではない。しかしながら同じくらい確かに、世界文学において最もすぐれた作品はこの知的相貌形成にもまたすぐれた手腕を見せている。だがここで考えたいのは、これをわれわれは知的相貌の成功と云わずして、人格又は性格の形成の成功と云えないか、どうかである。文学作品の構成にあたって、又その批評に当つても人格を単位として考えた方が有利であるか、あるいはまた、その下位概念である知的相貌の方が都合がよいかと云うことである。人格とは個体を外部への働きの主体として考えた言葉である。オールポートによれば「人格はその環境に対するかれ独特の適応を規定する心理、生理的体系の個体内の力動的体制」であると定義される。さらに人格の相面と云うか、あいよつて人格を形成すると考えられる因子には如何なるものがあるか、ヴェント以来いく多の説があるが、最近のアップェルバッハの説によると5個の基本的要素に分けられる。

- 1 性的性格：一般の人は男、女の二要素をもち、この比率の差が問題となる。
- 2 心的様体：支配的、従属的の如し。
- 3 情緒性：外的刺戟に対する反応の強さと持続性、感情の惹起されやすさ、心的な反応性、情緒性の高さ、低さ等
- 4 道德性：倫理的と反道德的の二極
- 5 知性、判断力、綜合力、把握力、記憶力

一般にいままで文学で人格とか、また性格とか云うとき、主として前四者の綜合したものが表象されたのであり、5項はこれをただちに知的相貌と云うより、5項の前4項との有機的関連において示されたものがルカーチの云う知的相貌であろう。ルカーチはプラトンの「饜宴」を例にとつて、「プラトンはその人物の異なつた考え方、同一の問題に対する異なつた立場、その人物の個人的性格や特色を最も深く、最も生き生きと現出せしめる点よりこの形成を始める。個々の人物の思想は抽象的、一般的結果としてではなく、この問題の思考過程の中に、即ちそれを心に描き、終まで考えるうちに、各人物の全人格が凝縮している。我々の目の前に展開するこの本質の様式、思索の過程の様式がプラトンをして個々の人間を深い特徴的な性質において示させる。すなわち彼がどう云う態度で問題に接するか、彼が証明を必要としない公理と考えるのは何か、彼が何を証明するか、証明の仕方、彼の思想の達した抽象の高さはどの程度か、どこから彼は具体的な例をとつているか、彼が何を怠り、何を跳びこえているかの描写によつて、一系列の生きた人間が我々の目の前に立っているように見えさせる」と説明している。

これを云い換えると、知識の範囲、判断における特異性、論理的鋭さ、その世界観等によつての人物形成とも云える。これが個人の教養、思想、趣味等の相違により、個人的特質として現れるし、また性格、人格とも関連をもつて、人物の形成に有力な方法であることは一応考えられる。しかしこの知性的反応形式が人格反応形式からそれ程独立したものであろうか。すなわち性格描写と相対立したもの、人物描写の独立せる領域で

あるのか、または性格描写の特殊な場合、すなわち知的対象を比較的多く扱った場合につけた名称であろうか。従来一般に抽象は文学のむしろ敵と考えられていた。しかしトーマス・マンなどは明日の文学として新しい小説を提唱している。これを知的相貌とは如何なる関係に立つてであろうか。強いて知的相貌を文学に求めることが、すべての種類の文学において可能であろうか。

しかしその前にわれわれは実際の創作活動に当つて、知的相貌がこれに関与しているであろうかどうか、いるすれば、如何なる形での関与が行われるかを調べなければならぬ。先きに述べた如く、ルカーチはトーマス・マンに対しては相当に深い研究を献げて、数個の論文を発表している。事実マンの創作過程の實際がルカーチの知的相貌の理念に大きな示唆を与えているのではないかと、考えられる。

マンの「ドクトル、ファウスト」に対しては同一著者の「ドクトル、ファウストの發生」なる著書があつて、当時のマンの内外の環境、自己の精神、肉体の状況、創作に関する内面的な事情が書かれている。

1942年の終頃マンは「ヨーゼフ」をまさに完成しようとして最後の仕上げをしておつた。ドイツ軍のフランスの無防備地帯への進撃、パタンのこれに対する抗議、イタリア軍のコルシカ占領、ドブルクの再占領、仏艦隊の自沈等大きくゆすぶれる第二次大戦の空気の中に、特にヒトラー政府の文明破壊的行為をマンは痛憤の気持をもつて見まもつていた。その頃シュトラビンスキーの記録、ポーダッへの「ニーチェの崩壊」、ル・アンドレ・サロメの「ニーチェへの追憶」をマンは大きな関心をもつて読んでいる。その印象は日記に「災厄多き神秘主義、言語同断、気の毒なくらい、あわれな奴」として記されている。しかしこの問題はこれきりで忘れ去られる。突然翌年の3月15日になつて、日記に「ファウストの記録を探す」にあり、友人にファウストの文献とフーゴ・ヴォルフの手紙を送つてくれるように依頼している。どうしてファウストにとりついたら明かでない。ヴォルフの手紙と一緒にすることからして、以前からマンがもつていた、「時代の中毒による芸術的存在の不妊と苦痛に堪えかねて、すべての抑制の除去を望み、悪魔との契約におち入る」と云う考えと、40年来抱いていた「自分の最終作はファウストである、ファウストが自分のパルシファルである」と云う予感とが結合したものであろうか、とマンは解釈している。ここに既に音楽家小説、主人公のレーバーキューンへのつながりが出てくる。その17日に、1901年にマンの立てたファウストの三行計画を見出して感激無量。そこで見なおすと、このテーマを中心にして生活感情がオーロラの如く取り囲み、生物的気分が気嘆の如く被つている。ニーチェ、デキルとハイドなど読書。この頃になるとすべての読書、会話がファウストへの関心に指導されている。しかしファウストは未だ形姿をとつてはいない。時にはファウストを放棄して他のものを書こうか、と云う気もおこる。戦争は進み、アフリカ攻防戦、ドイツ軍の敗報、絨壇爆撃のニュースに心が動かされる。依頼したファウストの文献到着、数日間もファウストのテーマの研究が続く。ブルーノー、フランク夫妻にファウスト計画を話す。その中にある日以前に書いたホーフシュターペルの下書きを見て、これとファウストとの間に寂寥のテーマを共通すること、前者はユーモア的、犯罪的、後者は悲劇的、神秘的であるのにす

ぎない点に気がつく。かくてブルジョア芸術の破産、それを具現するレーバーキューン、肉づけはシェクスピアとニーチェからと構想がきまり、ここにファウストの核心は出来上つた。またその根が養分をとるべき土壌もはつきりした。即ち根本テーマは文学と音楽の全体的危機、不妊の接近、悪魔との契約に予定された絶望であり、これに青い目と黒い目のエロティックなモチーフ、母のモチーフ等附屬的なモチーフが従属する。マンはこれに形姿を与えるために材料や附屬品をさがす。仕事は忙しくなる。こうして5月になるとファウストは既に独自の存在としての存在権を獲得して、自己のためにマンの努力と発見、試みを要求するようになる。しかしまだこの形姿は肉をつけていない。ところがある日マンは己れのミュンヘン時代の知人であつたヴァイオリン引きシューベルト・フェーゲルの思い出が心にかんで、これが求めていた主人公での外形であり、肉体であり、小説は音楽小説であるべきことが確定する。

以上トーマス・マンの作品形成の経過を見るときに、ルカーチの知的相貌が如何に適切な概念であるかは説明を要しない。ルカーチのこの提唱はマンの創作の実際からヒントを得たのではなからうか。余りにマンの創作の実際とルカーチの知的相貌の理念は一致して、マンに関する限りは、全く問題がないように見える。しかし詩人及び作家の創作過程はすべてかくの如きものであろうか。マンはその「トニオ、クレーゲル」において自分が北歐的なものの代表たる父と、南歐的なものの代表たる母との子として、この二つの性格が彼の中に相争つており、この相剋より生れたのが彼の文学であることを告白している。文学作品に描く処のものと己の真情とは別物である、真情は文学にならないことを強調して「感情、濫い、心からな感情は必ず陳腐な役に立たないので、芸術的なのは腐敗した我々芸術家の神経の興奮と冷い恍惚にすぎないんです」と云わせている。

このマンの詩人としてのあり方をシラーの定義に従つて分類するならば、これは感傷詩人に属すべきである。感傷詩人に対立するのが素朴詩人である。シラーは自己を感傷詩人に数えて、その対称、素朴詩人の典型としてあげているのがゲーテである。その素朴詩人についてエッカーマンとの対話の中でゲーテは云つている。

“Es war im ganzen nicht meine Art, als Poet nach Verkörperung von etwas Abstraktem zu streben. Ich empfang in meinem Innern Eindrücke, und zwar Eindrücke sinnlicher, lebensvoller, lieblicher, bunter, hundertfältiger Art, wie eine rege Einbildungskraft es mir darbot, und ich hatte als Poet nichts zu tun, als solche Anschauungen und Eindrücke in mir künstlerisch zu runden und auszubilden.”

素朴詩人の創作の過程はかくの如く、決して抽象から出発してこれに肉づけすると云う行き方をとるものではない。自分の心を徹底的に観察して、これをただ案配し、形成することが創作なのである。かかる詩人においては全人間と客観との折衝、そこから出てくる生命の流露が文学なのである。ここでは人格が大きな要素となつている。この型の詩人においては知的相貌と云つても、それは性格描写の附屬物以上にはでないではないだろうか。ルカーチはゲーテのウィルヘルム、マイステルの中のシェクスピア論を知

的相貌の成功例として出しているが、これは彼の意図とは逆に「知的相貌」とはこの作品からはむしろ浮いた、文学論的なものとの印象を与えているのではないか。かくて詩人の種類の相違が知的相貌の適否の判断に対して考慮すべき一つの重大な要素となる。

マンが分裂、腐敗、異常興奮を文学に求めるのに対して、ハンス・カロッサはゲーテの文学を評する言葉の中で次の如く述べている。「一度でも不純の意図や行為の沼地に身を止めたものが、最高なるもの、すべてを解放するものを歌い、形成できるかどうかは、別の問題である。気の利いた文句を考え出したり、まとまつた詩句を作るのは少し才能のある人ならできる。しかし深い意味と最も厳密なおきてが自由の歌としてひびきわたるあの高みに達することは、その琴の糸を暗い、穢い思想でよごした詩人にはできない」と云っている。これはゲーテの文学を祈りの文学とし、その上なるもの、己れと等しきもの、己より下なるものへの三つの畏敬の精神をあげて、これをゲーテの本質的なものと説いているカロッサが、その己れより下なるものへの畏敬の個所に関連して書いている言葉である。畏敬も一つの理念、モチーフとして知的相貌形成の一つの場合として考えて何等の差支えもない、とも云えよう。しかし外界に対して畏敬をもつて接するゲーテ、—— シェクスピヤの批評の中のゲーテの言葉を借りれば—— 外界に sich einschmeicheln することを要求するゲーテの立場とトーマス・マンやシラーとでは生活、文学の層の相違が感ぜられる。さらにリルケの如き詩人にこの知的相貌の概念を適用した場合はどうであろうか。存在し、献身し、何も要求しない事物を愛し、人間をも事物化したこの詩人には、この概念は簡単には適用されそうもない。何れにせよ、知識による以上に、生命をもつて、全人間をもつて人生、世界を把握せんとする文学において、知的相貌がどれだけの問題になるか疑問である。また少なくとも態度として知的相貌的でないゲーテの作品の方が、この要求に即していると思えるシラーよりも知的相貌の形成に成功しているとルカーチは云っているが、これも興味ある事実である。

パウル、フェヒターによればゲーテは詩人、特に叙情詩人である。シラーは劇詩人とすれば、文学上のジャンルの問題も知的相貌形成と関係があるのではなからうか。

1946年ドクトル、フェウストの制作中の日記にトーマス・マンは思いがけない言葉を書いている。それは「自分はプルーストとともに人格ではなく、従つて後世の追憶に残ることはあるまい」と云う言葉である。マン自らが人格でないと云っている言葉は、知的相貌なるルカーチの言葉の発生母地と思われる詩人自らの言葉として、またその制作の工事はまづ観念を掴み、これに肉づけをし、着物をつけて仕上げて行くのであることを我々がただいま見た、その詩人の言葉として特に興味深く思われる。ハンス・マイヤーはその著「トーマス・マン」の中でこの言葉を解釈して、第一にマンはハウプトマン等の詩人、特に当時ドイツ国民に愛好された詩人と対比して、己れがハウプトマン等に見られる文芸至上主義的な態度をもたない点を指して云つたものであるとしている。即ちこれらの詩人達は芸術の世界を至上なものとして、美人生に介入すること、社会的、思想的な問題にたづさわることをいやしき事柄としている。トーマス・マンが反対に時代の問題と真正面からとり組んで行くことが、ドイツ人を己れからそむかせる原因であるとして、ハウプトマン等の上述の人生態度を「人格をもつ」と名づけたのであ

ると説明している。

とするとこれはトーマス・マン一流の皮肉な表現であつて、問題とするに足りないことのようにも思われる。しかしこれはそれだけではなくて、これとは別に一つの象徴的な意味を含んでいるのである。

ファウストスの中のレーバー・キューンの黙止録のところに、「劇的形式は叙事的形式によつて交代」されようとしていると云い、これにつけ加えて、この発達は「世界における個人及びあらゆる個人主義の軽視の傾向」と一致したものであると云つている。

すなわち心理的なものに対する関心が段々と薄れる傾向にあり、個人的特異性は問題にならなくなり、作品創作の心理、または病理の彼岸にある客観的芸術的現実が己れ自らの姿を示すような作品が優勢を占めつつある、と云う訳である。云い換えれば個人的な創造をなくして、形成および形式の客観化への傾向がだんだんと強くなつて来ている、と云うのである。

芸術家自身の主観的なもの、その内奥の告白を最も大きな要素としている文学のジャンルは叙情詩である。この叙情詩が近代に入つてから次第にその勢力を失つて来たことは、文学史家ならずとも等しく認める処である。この原因についても幾多の説があげられている。文学の社会に対する作用からも説くことができようし、人間自身の精神状態の変異も考えることができよう。また文学のあり方、特にジャーナリズムとの関係をあげる人もあろう。しかし主観的なものは除去して、客観的なものに向う傾向、個人的芸術家と云う特殊な例、その芸術作品における実現は問題にならなくなつて、社会的結合が作品を通して要求されるのであると云う考え方も考慮に値するものである。

そのよつて来るところは何れにせよ、トーマス・マンはこれによつて、暗にハウプトマンを筆頭にするドイツの詩人達がいまだ「人格」をもち、1848年の革命以来すでに克服されてしまった文人趣味にめんめんとしているのに対して、自分は市民的芸術からすでに未来の曙光の中へ一歩ふみ出して、新しき世界への開拓者であるとの自負を暗示しているのでなかろうか。この新しき文学に対しては知的相貌の形成は最大の要素であろう。がしかし同時にその知的相貌は、はなはだしく人格的要素への連絡がうすいものになるに違いない。ハンスマイヤーは「マンの作品はその時代の問題の反射である」と云つている。問題はマンの云う如く、彼特有の文学の形が将来の文学の一般的、決定的な形になるかどうかにもかかっている。

以上文学と主観的精神の問題について多少の考察をした。特に主観的精神の研究の単位と云うか、立脚地が今迄はほとんど性格、人格に限られていたのに対して、まずこれらの今迄漠然と考えられていた正常範囲以外に新しい研究方向の出発点が与えられないかどうかの考慮がなされた。さらにフロイト、精神医学、医学心理学の領域に目を向けることも大切であろうが、現在ルカーチによつて与えられている「知的相貌」なる新しい立脚地は、第一に検討さるべきものとして取り上げられた。この新概念はたしかに色々の点で文学作品の構成の領域、またはその批評に対しても非常に価値の多い視角を与えてくれる。然しそこにまた自然にルカーチのこの概念を作つた基底である世界観からく

る、自らなる制約があるようである。また文学についての考え方、詩人の概念からもこの新立脚地の適否、有効、無効の判断の分れが生じよう。これらの点について多少の考察をした訳である。

これによつて、この新概念の適用について多少とも有用なる規定をうるためには、更に多くの型の詩人についての研究が必要であろうし、また知的なるものと人格的なるものとの連絡の構造についても更に深い知識が心要であろう。またマンヤルカーチの云う如き新しい文学が明日の文学として決定的であるか、どうか。これも慎重に研究さるべき一つの課題である。

また人格を土台とした知性、すなわち知的相貌が許されるとすると、性的相貌、感情的相貌、情緒的相貌、道徳的相貌などとも存在すべきではないか。これらは今まででは性格の中に含包されていたのであるが、やはり独特の研究領野とすべきではないか。これを実際の文芸作品について検討して見たらどんな結果が得られるのであろうか。これによつてこれらいくつかの相貌間の構造が明かにされ、医学心理学、精神医学の研究結果を参照することによつて、また個人的精神、即ち主観的精神の構造が明かにされるのではあるまいか。特に主観的な理論に陥入りがちな文学研究が、これによつてあるいは、多少ともにも客観的な足がかり、共通の広場が与えられはしないであろうか。

## Zusammenfassung

### Der Subjektive Geist und die Literaturforschung

Hirao KONAMI\*

Im Gegensatz dazu, dass neulich das Studium der Dichtung vom Gesichtspunkt des objektiven Geistes sehr viel und mit glänzendem Erfolg getrieben wird, spielt der subjektive Geist in der literarischen Forschung anscheinend nur eine bescheidene Rolle. Auch die Ergebnisse, die dabei gewonnen werden, sind nicht so versprechend. In Anbetracht, dass dabei ausschliesslich Charakter und Persönlichkeit herangezogen worden sind und die Ergebnisse noch viel zu wünschen übrig lassen, wird jetzt nach neuen Anhaltspunkten gesucht, um dadurch günstigere Rüstzeuge für die Literaturforschung zu gewinnen. Dabei fallen einem natürlich als hilfreiche Grundlagen des Studiums diejenigen Theorien ein, die von Freud und seiner Schule, von der medizinischen Psychologie und von der Psychiatrie dargeboten sind. Aber als einer der versprechendsten und interessantesten Standpunkte ist in dieser abhandlung der neue Begriff "die intellektuelle Physiognomie der künstlerischen Gestalten", den Georg Lukacs neulich empfohlen hat, vor allen anderen in Angriff genommen worden. Dieser neue Begriff bietet für das Studium der Gestaltungsprobleme der dichterischen Werke einen aufschlussreichen wertvollen Gesichtspunkt. Es scheint jedoch eine gewisse Enge und Beschränktheit an diesem Begriff nicht zu verkennen, die von der Weltanschauung Lukacs selbst bedingt sind, welche die Grundlage seines neuen Begriffes bildet. Andererseits muss auch die Vorstellung von Dichtung und Dichter, die jeder in sich trägt, das Verhalten der Beurteilenden gegenüber diesem neuen Begriff von Lukacs beeinflussen.

Um das endgültige Urteil über diesen neuen Begriff zu gewinnen, oder auch nur entscheiden zu können, ob, wie weit und unter welchen Einschränkungen er als fruchtbarer Gesichtswinkel in die Literaturforschung bewillkommen werden kann, muss das Studium weiter an allen Typen der Dichter Nachprüfung anstellen. Auch sind tiefere Einblicke in die Zusammenhänge dieses Begriffes mit dem Intellektuellen und dem Persönlichen unentbehrlich. Ob der Typ der Dichtung, den sich Lukacs vorstellt, wenn er von der Dichtung spricht, oder aber die Dichtung des Morgens von Thomas Mann wirklich eintrifft oder nicht, das muss auch ein en

---

\* Professor der Universität Shinshu

Beweggrund bei der Beurteilung dieses Begriffs bilden.

Wenn aber das Intellektuelle mit der Persönlichkeit als seinem Substrat literatur wissenschaftlich brauchbar ist, so müssen auch die geschlechtliche, die gefühlsmässige, die emotionale und auch die moralische ebenso gut bestehen. Sie sind bis jetzt in den Begriff von Charakter oder der Persönlichkeit eingeschlossen, aber scheinen jetzt ein selbständiges Studium zu beanspruchen. Was für Resultate bekämen wir, wenn wir solche an den wirklichen Dichtwerken studierten? Die Kenntnisse über die Beziehung zwischen diesen Physiognomien, von den Ergebnissen der medizinischen Psychologie sowie der Psychiatrie unterstützt, werden viel Licht über den subjektiven Geist sowie über seine Struktur bringen. Damit wird die Forschung der Dichtung einige objektive Tatbestände erhalten, auf die wir beim Studium in der Zukunft bauen können.